「奴隷ではなく、キリストのしもべとして」

エペソ人への手紙６：５－８

July.20.2025

## エペソ人への手紙６：５－８（パワポ）

Preface

エペソ書５：１８の「ぶどう酒に酔ってはいけません。むしろ、御霊に満たされなさい」という御言葉の実存的適用、具体的な実践現場についてこれまで見て参りました。

御霊に満たされる人、つまり、キリストを信じ御霊に満たされることを求めながら生きるキリスト者の信仰がどのような場面で、どのように営まれて行くのか、最初に教えられた重要な信仰の実践現場が、夫婦関係でした。

そして二番目に示されたのが、親子関係でした。

夫婦関係も、親子関係も、人間社会を営む上で最も基本となる人間関係でありますし、物事すべてがここから始まる土台となる人間関係ですよね。

つまり、キリストを信じて聖霊に満たされることを求めながら生きるとは、何かこう現実離れした、どこか遠くの夢や幻のような話ではなく、最も近く、最も現実に即した、誰もが問題意識を覚えている場にあっての営みであるということだと思います。

そういう意味で、今読みましたエペソ書６：５以降の御言葉、奴隷と主人の関係は、夫婦関係や親子関係という人間関係からもっと先に広げた人間関係でありますし、２０００年前の紀元１世紀のローマ帝国下の世界においては、社会そのものでありました。

もしかしますと、夫婦関係や親子関係以上に、誰もが深刻な問題意識を持ちながら直面していた、当時の社会の中で生きていく上での避けては通れない人間関係だったとも言えるように思います。

今の時代に当てはめるならば、職場を含めた様々な組織や組織同士の上下関係、上役と下役の関係、上司と部下や目下と目上の関係などにも例えることが出来るかと思います。

もちろん、今の社会には、名目上、奴隷制度は存在しません。

ガラテヤ書にもあります通り、人は皆、キリスト・イエスにあって一つであり、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もありません。

人は、神にあって、皆平等です。

聖書の説く、とても重要な人間観だと思います。

ところが、私たちが生きている実社会のその内実を見ますと、事実上の主人と奴隷のような主従関係は存在しているように思います。

国と国との関係、特に先進国と言われる国々と発展途上国と言われる国々との関係や、ありとあらゆる組織や企業同士の関係、その組織内の人間関係、色んな局面で実質的主従関係は存在しているでしょう。

Part One

人類の始まりからその行く末までの歴史を記している聖書には、人が神の前に罪を犯し罪人となって以来、人間が営んできたこの世界は、不平等と上下の階級的構造という重々しい現実社会を繰り返し量産し続けて来たことが、生々しく書かれています。

もちろん、人は、そのような矛盾のように思える悪だと思われる現実を打破するために、あらゆる思想や哲学や理論を提示しながら、改善しようと努めてきました。

でも、その時ごとに、形を変えて、また新たな主従関係が生まれ続けてきたことは否定の出来ない事実だと思います。

３，４年程前でしょうか、コロナ過による巣ごもり需要の高まりに伴って、某世界的企業の配達員の労働環境が正に奴隷と主人のような関係だと、その労働環境の改善が声高く叫ばれたことを思い出します。

今もそのような問題は色々とあり続いていますし、私たち自身を含めた人間関係、コミュニティーや集団・組織の中でも、その主従関係において何とか上に立って君臨し従わせようと、または、「今は、そんなの流行らないよ」とあえて下に居て、下の立場から上役を突きあげてやろうとしながら、静かな葛藤や争いを習慣のようにしながら生きているのかもしれません。

いずれにしろ、人間のどんな理論や思想や哲学やこだわりや制度をもってしても、神の御前に堕落した人間によって一度壊されたエデンの園の秩序は、今のこの世界において回復することはありません。

そのような不平等な、不条理な現状は、この世界が存続し終わるその時まで継続すると、聖書は私たちに語って下さいます。

ですが、イエス・キリストの再臨とともに神の国が臨む時、ようやくその壊れた秩序は過ぎ去り、本来の平和な姿へと回復し、完成し、イエス・キリストを信じる者たちは、その回復した・完成した神の国を受け継ぎ、神の国へと入れられ、キリストが王であるように王としてそこにすまうことが、聖書に約束されています。

これこそが、イエス・キリストを信じる聖徒たちに与えられた究極的な栄光の祝福ですよね。

だからこそ、「キリスト者にとって最も大事な、重要な、この大切なことをいつも覚えながら、今、自分が置かれている不条理や納得のいかない関係の中にも神の御手を覚え、本質的な善し悪しを見分けなさい。　そして、そんな関

係をあえて用いなさりながら、私という、私たちという罪の中に死んでいた者たちを、純真で非難されることのないキリストの身丈にまで成長させなさろうとしておられる神の御手を見出しなさい、生きなさい、イエス様ゆえに遜りつつ働きなさい」と、今日の御言葉は語って下さっているように思います。

Part Two

使徒パウロ先生は、エペソ６：５で、「奴隷たちよ」と語り掛けながら話し始めておられますが、「キリストを信じてもなお変わらず奴隷という身分であった方々は、この御言葉をどのような思いで受け取ったのだろうか」と考えてみました。

「そんな殺生なこと言わないで下さい。こんな社会構造を根こそぎ変えてこその信仰じゃないですか？」と思ったでしょうか。

それとも、「パウロ先生、あなたの仰る通りです。私たちの奴隷という社会的身分は、私たちに与えられた栄光ある神の子、王である祭司、天の御国を受け継ぐ聖徒であることをなお一層私たちの中に際立たせ、輝かせてくれる、今となっては、神のしるしとなりました。

この罪深い人間を、神の御前に聖なる傷のない者に作り替えるための、私たち一人一人に必要な神が用いて下さっている聖化の現場であり、うわべや見かけに惑わされずに本質を見抜く訓練の場だと、イエス様に出会い、信じ、思えるようになりました。

以前は、ただただ苦しみでしかなく、悩みでしかなく、自分の生まれ（出生）を恨むばかりでしたが、むしろ今は、奴隷という身分ゆえに、キリストに出会うまで罪の奴隷として歩んでいたといういうことが、良く理解出来る作用をもたらしてくれるものとなりました。

キリストに従うように、恐れおののいて主人に従いながら、そこに神のみこころを見出しつつ、うわべではなく、キリストのしもべとして喜んで仕えたいと思います。

そしてそこにこそ、主の報いがあることを期待しながら歩みたいと思います。

私たちはもうこれ以上奴隷ではなく、キリストのしもべという自由人です。

キリストにある良い行いと心の目がはっきり見えるように成ることを求め続けながら生きた先に、根本からの改革が起こることを信じます」と思ったでしょうか。

私は、両方の反応があったと思っています。

あるいは、「そんな殺生な」という思いを初めは抱いたけれども、御言葉とともに、御言葉のうちに祈っていく中で、パウロ先生が仰ろうとしたことを理解しようと、受け入れようと、「そうだ！」と思えるように導かれて行った方たちがたくさんいたのではないかと想像します。

Part Three

また、今日のこの御言葉を何度も読み、一人黙想していますと、「パウロ先生は、誰を、誰のことを思い浮かべながらこの御言葉をエペソ教会の人々に書き送ったのだろうか？」という考えが思い浮かんできました。

そして、「たぶん、使徒パウロ先生は、ヨセフのことを思い浮かべながらこの御言葉を書き送ったのではないだろうか」と思い付きました。
さらには、捕囚としてバビロン帝国に引かれて行ったダニエルのことも思い浮かべたかもしれません。
または、イスラエルの復興事業をリーダーとして導いたネヘミヤを思い浮かべたかもしれません。

このお三方の生き様を聖書を開きながら思い巡らしますと、同じく奴隷であり、奴隷のような身分から人生を始めた、正に、その自らが置かれた社会情勢の中の主従関係において、主人に仕える側の立場にあった方たちだったということに気付かされます。
ですが、その不条理さを嘆くことばかりに浸る代わりに、「キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に仕え、ご機嫌取りのようなうわべだけの仕え方ではなく、キリストのしもべとして心から神のみこころを行い、人にではなく、主なる神様に仕えるように、悩みながらも喜んで仕えて行った方々でした。
もちろん、真摯に仕えたにも関わらず、理解されないで、左遷のような目にも遭いましたし、牢獄にまで入れられることがありましたが、時に適って主からの報いを受けることを知っているかのように、信仰者として堂々と生き、時に適った報いを受けて行きました。

ヨセフは、自分を奴隷として売り飛ばした兄たちに向かって、「お兄ちゃんたち、私を奴隷として売り飛ばしてしまったことゆえに私を恐れたり、心を痛めたり、自分を責めたりしないで下さい。　神が私をここに遣わし、私たちのいのちを救うようにして下さったのです。　私を結果的にここエジプトの権力者となるよう遣わしたのは、あなた方ではなく、神なのです」（創世記４５：４－８）と告白しながら、１３年間にも渡る理不尽な奴隷生活に神のみこころを見出しました。

ダニエルも、不当な訴えによって獅子の穴ぐらに投げ込まれた時、「私がいつもお仕えしている神が、御使いを送り、獅子の口を塞いで下さったので、獅子は私に何の危害も加えませんでした。　神の前に私が潔白であることが認められ、王よ、あなたに対しても、私は何も悪いことはしていません」（ダニエル書６：２２）と告白しながら、その不条理な仕打ちの中に神の御手を見出しました。

ネヘミヤも、「ああ、主よ。どうかこのしもべの祈りと、喜んであなたの名

を恐れるあなたのしもべたちの祈りに耳を傾けて下さい。　どうか今日、子のしもべに幸いを見させ、王の前であわれみを受けさせてくださいますように。私の神よ、どうか私を覚えて、いつくしんで下さい」（ネヘミヤ記１：１１、１３：３１）と祈りながら、自らが生ける神の、キリストのしもべであることを告白しました。

ヨセフの人生にも、ダニエルの人生にも、ネヘミヤの人生にも、神様の明確な意図が御有りだったということが分かります。
即ち、神の子としての品性を、彼らの内に練り上げなさっていくという意図です。
信仰者は皆、この途上にあります。
それゆえに、誰かが誰かを、「あの人は未熟だ」とか、「あの人はクリスチャンらしくない、あの人はクリスチャンとしてまだまだだ、なってない」とか、「あの人は牧師として、伝道師としてまだまだだ」とかということを思ったり、口にしたりすることが、どれだけ霊的無知を露わにしてしまっていることであるのか、神のみこころを、神の御手を、神の御言葉を見出せていない言動あることか分かりません。
キリストを信じる者すべてが、途上にあるのです。

先週、ある森学の先生との立ち話で、「待つことですよね～（人の成長は）」と仰って下さったのですが、本当にその通りだと思います。
モーセがモーセになるのに１２０年掛かり、ヨシュアがヨシュアになるのに１１０年掛かり、アブラハムも、ダビデも、使徒パウロ先生も、アブラハムとなり、ダビデとなり、パウロとなるのに、長い時間を神さまはお掛けになりました。
皆が、神の御手にあって、その途上にあるということですよね。
詩篇１０５篇には、ヨセフもそうだったと詠っています。

**詩篇１０５：１７－１９（パワポ）**

「主の言葉が、彼を錬った。」
主の言葉が、ヨセフを錬ったのです。
ヨセフを錬ることが、神のみこころでした。
使徒パウロ先生も同じことを仰っています。

**ローマ人への手紙５：１－５（パワポ）**

キリストを信じる信仰によって、私たちは、今置かれている場を納得し、受け入れることが出来ます。
キリストを信じる信仰によって神との平和に入れられたならば、「今立っているこのところが、神の恵みだ」と、「神の恵みへと、私たち一人一人を導き

入れて下さったんだ」と悟ることが出来ます。
　たとい、それが苦難であっても、奴隷の身分であっても、その苦難が、神の子に相応しい、神の子らしい品性を生み出すための、私という罪深い罪人を神のみこころに沿った者へと錬り直し作り替える、私に必要な場であることを知ります。
　そして、それが、私たちの希望となります。
　もしかすると、今は、そんなことを覚えられないところにあるかもしれませんが、きっと神様は、そう告白するところへと導きなさることでしょう。
　誰もが、その途上にあることでしょう。

## Part Four

　２０００年前の使徒パウロ先生の時代、ローマ帝国には６０００万人以上の奴隷がいました。
　ローマ帝国下の都市によっては、１／３から半分程の人々が奴隷だったようです。
　新ローマと言われたエペソも例外ではありませんでした。
　エペソにも、エペソ教会の中にも、少なくない数の奴隷の身分の方たちがいたように思われます。

　にも関わらず、使徒パウロは、奴隷制度の改革よりも、関係の改善、人と人との関係の改善、奴隷と主人との関係の改善に力点を置きながら、エペソ教会の信徒たちを指導しました。
　なぜか？
　関係の変化こそ、制度の変化よりも、はるかに重要で本質的なことだったからですよね。

　実際に歴史学者たちは、このような福音の語り掛けが、この御言葉の実践が、主従関係という人間関係に変化をもたらし、結局は、奴隷制度を崩壊させた最も大きな要因となったと指摘をします。
　１７００年代後半から１８００年代にかけたイギリスでも、奴隷制度を廃止へと導いたのは、福音に立ち、聖書の御言葉に立ったウィリアム・ウィルバーフォースという方でありましたし、アメリカの奴隷制度を廃止させたのも、聖書を人生の教科書としていたアブラハム・リンカーンのような方の献身ゆえだったことは、よく知られている事実だと思います。

　また、こんな逸話もあります。
　アメリカのアフリカ系の方々の基本的人権を要求する運動を指導したマーティン・ルーサー・キング Jr.牧師が、ワシントン市内の黒人街を歩いていました時、一人のアフリカ系の青年がしていた掃除を投げ出して、通りを行き交っている人たちに悪口雑言を浴びせかけながら、掃除道具を投げ尽きているのを見ました。

キング牧師は、その青年のところに歩み寄って行き、青年の肩に手を置きながらこう語り掛けました。
「兄弟、君は今、神が創造された美しいこの地で、神の栄光のために、この地を綺麗にしているという誇りを持つことは出来ないだろうか。」

その立場がどうであれ、神の栄光のためにその職を、働きを全うしようとするならば、それ自体が聖職、聖なる職業、聖なる働きとなり、聖なる場となるというのが、聖書が私たちに教えて下さる人生観、職業観、生き方だと思います。
そして、「神の栄光のために」と考え、意識しながら物事に取り組むならば、自然と、そのことは、神のみこころというふるいに掛けられていき、不正な成功を求めることを止め、世的に見たら失敗であったとしても、その聖い聖なる失敗から始まる祝福へと視点が写り、その祝福へと導かれて行くことでしょう。

キリストに従うように主人に従い、人に接していこうとしても、そんなもの跳ね除けられたり、認められなかったり、逆に妬まれたりすることがあるかもしれません。
もちろん、「暴力や正当性を欠いたことに黙って目をつぶって従いなさい」と、「どうしようもない悪には屈するしかありません」ということでもなく、善をもって悪に打つ勝つことが、私たちキリスト者の生き方であり、それこそ、神の主権をこの身に具現する道であるということです。

直ぐには、結果が出ないかもしれません。
でも、公正な神様は、善をもって悪に打ち勝つ生き方を諦めずに生きるならば、時に適って、ヨセフにそうであったように、ダニエルにそうであったように、ネヘミヤにそうであったように、聖なる報いを与えて下さることでしょう。

## Conclusion

最後に一つの例え話をして終わりたいと思います。

３人の人が、礼拝堂を建築する現場で働いていました。
その現場の前を行き交っている一人の人が、その３人に質問をしました。
「皆さんは、何の仕事をなさっているのですか？」

始めの人が答えます。
「あなたは、これを見て、分からないのかい？　石を切り出しているんだよ。石を。」
２人目の人が答えます。
「何の仕事をしているかって？　何の仕事なのかは、俺には何の関係もないよ。　ただ金を稼いでいるだけさ。金を。」
そして、３人目の人はこう答えました。

「はい、今私は、神の宮を建て上げているのです。」
同じ場所で、同じ仕事をしているにも関わらず、どれだけ違う視点で、どれだけ違う志しで仕事をしているでしょうか？
３人の内で、誰が一番喜んで仕事をしていたでしょうか？

今日の聖書に御言葉は、直ぐには、その報いを得ることが出来なかったとしても、キリストを思い、キリストに従うように、キリストのしもべとして、真心から人に仕えながら生きるならば、働くならば、時に適って、主からの報いを受けることになるということを、思い出せてくださいます。

私たちは何を見て生きているでしょうか？
どこに目を向けて生きているでしょうか？
神のみこころを見、神のみこころに目を向けて生きたいと願います。
そこにこそ、人にとっての最高の報いがあります。
最後に、もう一度、御言葉を読んで終えたいと思います。

エペソ人への手紙６：５－８（パワポ）

お祈りいたします。

祝祷：エペソ６：７－８